

出直し

とんだ玉三郎

梶田滋は、中高一貫の有数の進学校を卒業、難関の大学を出て、国家公務員の上級試験にトップクラスの成績で合格して、財務省に入省した典型的なエリート官僚である。この度、地方の財務局勤務を終えて本省に戻ってきた。

城田美野里はこの年の九月に結婚したばかりである。結婚式に招待した高校時代の友人たちを自宅に招きたい思っていた。夫の健治にそのことを打ち明けた。

「再来週の日曜日、家にいてくれないかしら」

「特に出かける予定はないからいいよ。なにか用事でもあるの」

「結婚式の時にスピーチをしてくれた詩織と私と一緒に歌を歌ってくれた涼子を家に呼びたいの」

「分かった。女のおしゃべりに付き合うのは得意じゃないけど話の相づちくらいはうつよ」

「ありがとう。お掃除とか、お料理の準備は私がするから」

「掃除くらい手伝うよ。それに買い物もね」

「その前の日の土曜日は休めるはずだけど、助かるわ」

「その代わり、俺の友達を呼んだ時にはよろしく頼むよ」

「分かってるわよ。いい奥さんでいてあげるから安心して」

「俺たちの両親も、そろそろ呼ばないといけないね」

「年末になるとパパたちも忙しくなりそうだから、私の方は年が明けてからかな」

「親の都合も確かめておくけど、俺も来年だな」

遠山詩織は女性が身に着けるちよつとしたアクセサリを作って販売する小さな会社を経営している。大学の時に趣味でアクセサリ作りを始め、ネットに出したところ、思いのほか売れた。それで趣味が高じて本業となり、卒業後に会社を立ち上げた。仕事は軌道に乗り、いまでは社員二人とパートさんを雇ってやっている。小さな店舗を借りてはいるがネット販売が主である。美野里

から家に招待したいと言ってきた。日曜は忙しく店が気になるが、友人との付き合いを優先した。

約束の日、駅で落ち合った詩織と涼子が一緒に訪ねてきた。美野里は健治にふたりをあらためて紹介した。

「遠山詩織さんと羽村涼子さん。ふたりとも高校以来の友人よ、私たち三人はいつも一緒だったわ」

「結婚式では大変、お世話になりました。よく覚えていますよ。遠山さんのユーマアに富んだ美野里の高校時代のエピソード印象的でした。羽村さんのデュエットも呼吸がよくあってましたよ」

健治は如才なく応対すると、美野里は詩織を自慢の友達のように紹介した。

「詩織はね、社長さんなのよ。偉いでしょ」

詩織は謙遜して言った。

「美野里、そんなに持ち上げないでよ。社長と言ってもアクセサリーを作って売る小さなお店です」

涼子も口を挟んだ。

「でもやつぱり、偉いわよ。自立する女って感じ。私なんか、落ち着くところに落ち着いて、子供の世話に追われ、すっかり世の中から隠遁よ。羨ましいわ」

「子供さんも連れてくればよかったのに」

「たまには子供から離れてゆつくりしたいわ。夫に押し付けてきた」

詩織が横に置いてある紙袋を取り上げて言った。

「おしゃべりして忘れるところだったわ。口に会うかどうか、分からないけれど、ふたりに相談してワインを買ってきたわ」

「どうもありがとう。さっそく皆で頂きましょうよ」

美野里が用意したサーモンのカルパッチョ、シーザースラダ、ローストビーフ、から揚げなどが所狭しとテーブルの上に並べられた。健治が冷蔵庫から缶ビールを四本取り出して、会食が始まった。美野里の高校時代のエピソードに健治が感心したり、笑い転げたりして時間が過ぎた。料理もあらかたなくなり、ワインもあけた後、涼子がぼつんと言った。

「美野里も結婚したし、高校時代の仲良し三人組で詩織だけね。自由を楽しんでいるのは」

「自由を楽しんでいるわけではないし、私もいい男がいたらキープしておく

たいわ。子供も欲しいし」

涼子はちやかすようにして言った。

「社長さんが相手なら、なかなか注文が多そうね」

「そんなことはないわ。家事を分担してくれて仕事を続けられるようにしてくれれば、それだけでいいわ。ひとりで頑張っているとこのまま年をとっていくのかと、ふと不安に思うことがあるわ」

美野里が否定する。

「なに言ってるの、私たちまだ三十になったばかりだよ。そんなことは四十路過ぎの女が言うことよ」

「でも、女の人を相手にする仕事でしょ。男の人と出会う機会がほとんどないのよね」

「そんなことないでしょ。私たちもそうだったけれど、きっと出会いはあるわよ」

すると、健治が酒の勢いに任せて、言わなくてもいいことを遠慮なく言った。

『昔、クリスマスケーキ、今、オセチ』って知ってるかな」

美野里が訊いた。

「それ、なんのこと」

「つまり、クリスマスケーキは十二月二五日を過ぎれば値打ちが下がるだろう。二五才とかけているんだよ。それに対して、オセチは一月三十一日まで。三十一才ってことさ、それを過ぎると女は慌てだすということだよ」

美野里は詩織の手前もあつて慌てて言った。

「そんな言い方は女に対する侮辱よ。昭和のオジサンの言うセリフ。『結婚したい時』が適齢期。何を言ってるのよ」

健治は調子に乗り過ぎた、と謝った。

「俺、ちよつと酔っ払ったのかな。変なことを言つてごめんなさい」

詩織は言い過ぎたと謝っている健治をフオローするように言った。

「気にしてないから心配しないでください。四十路までにはまだ十年ありますから」

年が明けて、健治の両親が尋ねてきた。

「呼ぼうと思っていたのだけど、オヤジも出張が多くて年が明けてしまつてごめん」

「いいんだよ。ふたりとも仕事が忙しいんだから。あゆ美も連れて来ようかと」

思ったけど、大勢押しかけると美野里さんも大変だからと思って今日はよしんだ」

「ぜんぜん大丈夫ですよ。せっかくだから妹さんもご一緒にくればよかったのに。あゆ美さんとも会いたかったなあ」

「そうだよ、アイツともめったに合わないんだから連れてくればよかったのに」

「ぜひ遊びにいらして、と言っておいってください。妹さんともお話したいし」
健治の母は言った。

「ありがとう。そう伝えておくわ。美野里さん、健治はどう。甘やかしたつもりはないけれど、好き嫌いが多くてお料理、大変でしょ」

「いや、そんなに思ったほど好き嫌いはないし、共働きなので料理作りも代わるやっていますから、助かっています」

「あら、いいわね。健治は家にいた時には料理なんかしたことがなかったわ。あんた、料理なんかできるの」

「会社に入って札幌の営業所に配属になった時に、毎日、外食や店屋物では飽きるのでネットでレシピを見て始めてみたんだ。俺の料理も結構いけるよ」。

「美野里さん、本当にそうなの。不味いなら不味いって言ってね。言わないとこの人わからないからね」

「お義母さん、そんなことありません。健治さんの作った料理、おいしいですよ」

それまで会話に輪に加わってなかった健治の父がおそろおそろ言った。

「ところで、美野里さん、お友達に結婚相手を探している人はいないかな。私の大学時代からの友人が息子さんの結婚相手を探している、っていうんだ。その息子さんは仕事が忙しく、なかなか出会いの場がないので親に相手を探してくれと言ってきたそうなんだ」

健治は言う。

「今時、珍しいね。親に相手を探してもらうなんて。まるで見合い結婚だ」
美野里は相談にのってやらないと悪いと思って訊いた。

「どんな、お仕事なんですか、忙しくて結婚相手も探せないなんて」

「財務省に勤めていて、最近まで大阪の財務局にいたが、本省に戻ったのでそろそろ結婚を考えたいと言いだしたそうなんだ。毎日、帰りも遅いし、休日もちよくちよく出勤しているらしいので、合コンなどの女性との出会いの機会もないそうだ」

健治が自分の会社と見比べて言った。

「役所って、そんなに忙しいの。それじゃあ、ブラック企業と同じだな」

美野里が訊いた。

「お年はおいくつですか」

「確か、三十二と言っていた」

すると健治が話を引き取った。

「この前、家に来た遠山さんはどうだろう。年恰好もちょうどいいんじゃないかな。役人なら生活も安定しているし」

「さあ、どうかな。そんなに忙しいのなら、家事を夫婦で分担することもできないだろうから、彼女も仕事が続けられなくなるんじゃないかしら」

「結婚すれば、男も変わるよ。それに遠山さん、しみじみと伴侶が欲しいというようなことを言っていたじゃないか。財務省のエリート官僚の奥さんになれば、仕事を辞めて家事に専念すると言い出すかもしれないじゃないか」

美野里は咎めるように言った。

「それは女に対する偏見よ。『女は仕事より家庭をとれ』と言っているようなものじゃない」

父は息子を咎めるように言った。

「お前も随分古臭いことを言うね。俺の会社でも部長クラスで共稼ぎの夫婦はいくらでもいるよ」

両親は息子夫婦と食事しながら語らって帰って行った。

詩織は美野里から話を聞き、役人とはどんな人種なのかと興味が湧き、会ってみようと思った。初対面の場所は役所の最寄り駅近くの喫茶店だった。お互いに服装の特徴を知らせあって待ち合わせた。詩織は喫茶店に入ってきた紺のストライプの背広に黄色のネクタイの男に近寄って声をかけた。

「失礼ですが、梶田さんじゃないですか」

「そうです。梶田滋と申します」

さすがに役人だ、身なりはきちんとしているし、清潔そうな感じを詩織は受けた。体もがっしりしてスポーツマンタイプだ。

「遠山詩織と申します。友人を通じて、貴方のことを紹介してもらいました」

「今時、珍しいと思われるかもしれませんが、父に結婚相手の女の人を紹介してくれ、と頼みました。わざわざ、役所の近くまでお越し頂き、ありがとうございます。父が同伴すると言いますから、いくらなんでも、それは失礼だろう

と断りました」

詩織はなんと正直な人、いまどき、このような男がいるのかと感心した。

「梶田さんは国家を背負う大切なお仕事をされているのですよね。既にお聞きでしょうが、私は女性向けのアクセサリーを売る小さなお店をやっています。お役人の世界とはまったく違うと思います」

「いや、政府という大きな組織のまたそのなかの一部の組織の歯車みたいなものです。自分のしたい理想的な目標を見失わないように若手の有志で勉強会を開催して、国のためにはどういう政策が必要のかなど討論したりしています。しかし、現実とは乖離があつて……」

「毎日、遅くまで働いているとお聞きしました。大変ですね」

「学生時代にラグビー部に所属してましたので、体には自信があります。役所なんてなれば体力勝負ですよ。もともと仕事はどこにいても同じようなものじゃないですか。アクセサリーを専門に売る店があるんですね。知りませんでした」

「大学時代にアクセサリーを作ってネットで販売するサークルに入っていました。卒業したら放送業界に入ろうかと思っていたのですが、趣味のつもりだったアクセサリー作りが、いつのまにか本業になってしまつて……」

滋は一目見た時に華やかさがあり綺麗な人だと思っていたが、テレビのアナウンサー志望だったのかと勝手に解釈した。

「趣味が仕事になるなんて、羨ましいですね」

お互いに自分の仕事や趣味なのを語り合つてわかれた。

自分の思うように仕事にしている詩織の話を聞いて、滋は役所の先輩に議論をふっかけた時のことを思い出した。

「山中さん、コロナ対策の補助金捻出で、どんどん赤字国債を出すのはおかしいと思いませんか」

「そう思わないでもないが『自国通貨で国債を発行する限り財政破たんは起きない』とされている。当面はこの方針は変わらないだろう」

「また、MMT理論ですか」

「選挙に勝つことしか考えてない政治家たちからは、財源は何でもよいから、バラマキに賛成さえすれば文句はでない」

「バラマキで満足する国民もどうかと思います」

「コロナやエネルギー高騰対策で国債をどしどし発行するようになったヨーロッパ

ツパ諸国やアメリカでもバラマキをやっている」

「この動きに批判的な人もいます」

「言論は自由だ。そりゃ、いろいろな意見があるだろう。赤字国債を多量に発行すれば、国民も『国は借金で大変だ』と思うので、増税をしやすくなる。税収はわが省の力の源泉だからね。多ければ多いほど我々にとってよいのだ」

「それって省益じゃないですか」

「おい、書生のようなことを言うなよ。これが今の主流だ。ちょっと前にある事務次官が『このままでは国家財政は破綻する』と雑誌に書きたてた。でも、なにひとつ変わらなかったじゃないか。世の中とはそんなものだ」

「やっぱり、私は違うと思います。国債を出来るだけ出さず、野党の言っているように企業の内部留保に課税するとか、外貨準備金の一部を取り崩すとかの政策を取るべきです」

「外貨準備金はわが省の財産だ。企業増税には政府は反対している。政府に逆らっていたら出世できないぞ」

山中は滋の肩をポンポンと叩いて部屋を出て行った。山中は滋の高校、大学を通じての先輩であり、尊敬していただけにショックだった。滋は山中を熱血漢だと思っていたが、本省に長くいるうちにすっかり変ってしまったと寂しさを感じた。省の幹部の人事権は政府が握っている。政府に反対の考えを持っている部下を幹部が煙たがるのも無理はない、と思った。

単なる組織の歯車にしか過ぎない自分の無力さを感じるとともに「俺はまだまだ青臭い、早く大人になれ」と呼び掛ける、もうひとりの自分もいた。

詩織は滋との初対面で、礼儀正しいがおとなしいように感じた、国家を背負う役人ならもつと覇気があってもよさそうだ。人を威圧するような感じを受けるとかと思っていたので拍子抜けした。起業して頑張っている同年代の経営者のほうが覇気もあるように思った。

その後、詩織と滋は度々会うようになった。ある日、滋は詩織がいるというアクセサリー店を覗いてみた。店頭にはイアリング、ペンダント、ブレスレットなどが並べてある。それらを見てみると、若い店員がやってきて言った。

「いらっしやいませ。どんな品をお探しですか」

滋は慌てて言った。

「いや、買いに来たのではないです。知っている人がこちらで働いていると聞いたものですから」

「なんという、名前の人ですか」

「遠山詩織さんです」

「社長ですか、社長は、今、工房のほうに行っています。午後はこちらに立ち寄るはずですよ」

滋は詩織が店をやっていることは知っていたが「社長」という肩書を耳にして、そうか一国一城の主か、大したものだとあらためて感心した。そう言えば、同級生にも起業をした奴がいたな、でもそいつらは皆、変わり者だったな、と顔を思い出した。

次に会ったときに、滋は開口一番、言った。

「この前、貴女のお店の近くまで行く機会があったので、どんな所なのか覗いてみたんです。工房もあると聞きましたが手広くやっているんですね」

「いや、小さな会社です。工房には私を入れて三人、店にはパートさん、ひとりですから全部で四人です。ネット販売が増えてきたので工房にもう一人雇おうと思っっていますが、なかなか来てくれる人がいなくて……」

「随分、若い時に会社を作ったんですね。感心しました」

「私は女子大出身ですが、同級生で会社を興した人はいくらでもいますよ。

私よりも手広くやっている人もいます」

「そうなんですか。私の大学でもそう言えば、女性で起業した人も何人かいましたが、その後、どうなったか知りません」

「女性は役所や会社の組織に入っても『ガラスの天井』があるから男性のようになかなか上に上がっていけないでしょう。それなら、いっそ独立しよう、と思うのじゃないでしょうか。もっとも私の場合、アナウンサーになりたくて、NHKといくつかの民放の試験を受けましたが、運悪くどれも落ちたということもありましたがね」

と言っ、苦笑いをした。

自分の職場の周りにもほとんど女性はいないな、と滋は思った。

デートを重ねるうちに自分とはまったく違う世界で生き生きと働いている詩織にだんだんと惹かれるようになった。それとなく、結婚の話を持ち出すと、詩織はちよつと躊躇していたが、思い切って言った。

「結婚しても店を続けるつもりです。それには家事を夫婦で分担してやるというのが前提です。でも貴方の仕事を今のまま続けていては、それは無理だと思います。それとも、仕事を調整して、私に協力してくれますか」

これは明らかに断るという意思表示だ。仕事が忙しいのは分かっているはず、それなら初めから付き合うなど言わなければいいのにと腹が立った。

「御承知のように役所は多忙で家事を分担するようなことはとても出来ません。残念ですが、この話はなかったことにしてください」

「御免なさい。ずるい言い方かもしれませんが、口では『仕事を続ける』と言いながら、どこかに辞めてもいいや、という気持ちがありました。自分の気持ちがあきちんと整理できないまま中途半端なことをしてしまっただけで済みませんでした。お許しください」

詩織は下を向いたままだった。滋は言い訳に過ぎないと思い、返事もしなかった。一方、詩織の心が揺れ動いたことがあったのも事実だった。

それから一週間ほどしてのこと、滋が出勤すると職場のそここで数人ずつ輪になってひそひそ話をしている。何事かと近くの同僚を掴まえて訊いてみた。「芝田が今朝、自宅で首つり自殺を図ったそうさ。幸い、発見が早く一命はとりとめたようだ。それでさつきから蜂の巣をつつく騒ぎだ。ここのとこ連日続く徹夜仕事でノイローゼ気味になっていたようだ」

これを聞いた滋は、彼奴は気のいい奴だったけど、ちよつと線の細いところがあつたな、それにしても、危うく仕事の犠牲になるところだった。いったい、命を賭けてまでやる仕事というのはなんなのかと、考え込んだ。

滋は大学のラグビー部で一緒だった江島と久しぶりに会った。彼は厚労省に入ったが二年経って役所を退職して、アメリカに渡り、MBA（経営学修士）を取得して、アメリカの投資会社に数年いて帰国、IT企業を立ち上げたという変わった経歴の持ち主だった。

「久しぶりだな。お前、まだ役所にいるのか」

「そうだ。大阪の財務局から開放されて今年、本省に戻ってきた」

「役所って、長くいて、生きがいを感じられるところか。俺はすぐに見切りをつけたよ。また、入った時の成績で自分が将来どうなるかだいたい見えているなんて、おかしいよ」

「そうでもないよ、最近は人事も変ってきていると聞く」

「どうかな。お前は成績が優秀だったから、最後まで残れるかもしれない。でも、それがどうしたというのだ。一度しかない人生、本当に好きなことが出来るのか」

「そう言われると難しいが、誰かがやらなければならない仕事だ」

「それは自惚れだ。今、俺はIT会社を経営しているが、AIを使えば、かなりの事ができるよ。例えば、野党の質問に対する国会答弁作りだ。過去の質問や答弁、関連法令をデータベースに入れておけば、それなりの答弁書ができるはずだよ。その後にチェックする必要があるだろうけど」

「理屈はそうかもしれないが、前例重視、慣例重視の役所では出来ないな」

「そういうことを言っているから、だめなんだ。デジタルでも役所が一番遅れているよ。未だにフロップピーを使っているなんてガラバゴスだよ。企業は他と競争しなければならぬが、役所は他と競争しなくてよいからな、その差だろう」

「お前と話していると役所は罵倒されそうだな。しかし、一面、真実をついているよ。悔しいけど」

「自分が国を支えているという夜郎自大の考えは早く捨てたほうがいいぞ。官僚は、俺に言わせると『裸の王様』だ。世の中の現実に向き合い日本のこれらの財政をどうするつもりかとか、外国との競争に打ち勝つためにはどうすればいいかとかを、本気で考えている奴がいるのかね」

滋は反論したくなかったが、上には逆らえないという事情は早くに役所を辞めた江島には分かってもらえないだろう、これ以上、議論すると不愉快になるだけだと思っ、大学時代のラグビー部の部員の話などを話して別れた。

滋は同僚の自殺未遂のこと、江島の話聞いていて心がぐらつき、山中の話思い出して改めて無力感を感じた。

詩織は滋のプロポーズを断ったことに罪悪感を持った。プロポーズを受ければ仕事を辞めてもいいとも思ったこともあったが、やはり、仕事を取った。詩織の返事はエリート官僚のプライドを大きく傷つけただろう。もう断ったのだから取返しがつかない。中小零細企業の社長の寄り合いなどで詩織に言いよってくる男もいたが、結婚したいというような男はなかなか現れなかった。まだ三十才になったばかりだ。当分は仕事に没頭してきたいとの気持ちだった。

それから数週間、役所にこのまま留まるべきかどうか、滋の心は揺れ動き続けたが、思い切って決心して父に打ち明けた。

「お前の考えには賛成できないね。せつかくいい役所に入ったのだから、何も

冒険のような真似をすることはないだろう」

「オヤジは会社員だったから、よく分からないだろうが、役所というところは決まったレールを走る列車のようなもので、自分の人生のずっと先まで見えているんだ」

「それは言い換えれば生活が保証されているということだろう。国をリードする立場にいるのだから誇りを持てるだろう」

「俺もそう思っていたが、上の方は政治家のほうしか見てないし、言いなりだ。その政治家たちは選挙に勝つことしか考えてない」

「多少はそんなこともあるだろうが、政権だって代わることもあるし、日本もまんざら捨てたものでもないと思うよ」

「生意気なようだが、一度しかない人生、賭けてみたいんだ」

親子の押し問答が続いたが、父は息子がどこまで真剣に考えているかと思っ
てきてみた。

「留学には金がかかるぞ。俺は出せないよ、そんな金。いったい金はどうするつもりだ」

「爺ちゃんが俺にくれた金、あれを使おうと思っている」

滋をことさら可愛がっていた母方の祖父は資産家であった。その財産の一部を滋に譲るといふ遺言をのこして最近亡くなったのだった。

父は決心の固いことを知って説得は諦めて言った。

「最近の若い者は何を考えているのか、さっぱりわからん。お前の決心がそこまで固いのなら、俺はもう止めないよ。でも後で後悔するなよ」

アメリカのMBAに行く決心して、滋は江島に相談した。

「俺、役所を辞めることにしたよ」

「そうか。まさか、あっさり辞めるとは思わなかったよ。決断するならもう少し早いほうがよかったな」

「お前からは周回遅れになってしまったが出直すよ。ところで、MBAに行くってどんなことが一番、役にたった」

「MBAで学んで、先入観なしで突き詰めてものを考える習慣を身につけることが出来たことが一番の収穫だったな。目先のことに右往左往しなくなった。

それに数字に強くなったことだ。財務諸表などが理解できるようになった。こ
こは法学部出身者の一番弱いところだからな。さらに、いろいろな業界、いろ
いろな国の人との人脈が出来たことだ。今でもお互いメールで情報交換してる

よ」

「いいことずくめ過ぎて、まるでMBAの広告塔のようだな」

「まあ、アメリカで企業経営者になる登竜門的存在だからね。日本企業もMBA出身の経営陣が増えると変わっていくだろう」

「官僚の世界にはないものを得られるということだな」

「そういうことだ。日本の役所とは真逆のところだ」

心を決めた滋は役所で先輩の山中に打ち明けた。山中は意外だと思って説得した。

「確かに最近、辞める若い奴が増えてきた。しかし、そいつらは、いてもうだつのあがない連中ばかりだ。しかし、お前は違う、それにもういい年だ。そのままいけば、将来、確実にずっと上までいける。それをなぜ好き好んで辞めるのだ。考え直せ。きっと気が変わるよ。『辞めたい』なんて一時の感情だろう、俺も昔、そんな気になったこともあった。日本の国家のことを考える。MBAの先は企業に入るか、起業だろう。一企業にいて何ができるのだ。政府という組織のなかについてこそ、大きな仕事が出るのではないか」

滋は内心には保身しか頭にないくせに「国家」を持ち出すなんて、卑怯だ、誤魔化しだ、と我慢しながら聞いていた。役所に入った時の成績がその後の人生の出世を左右するなんて時代遅れもいいところと思った。課長からも同じような説得を受けたが聞き流した。

役所を退職して、いよいよ準備が整い、出発の日となった。その日、空港のラウンジで思いがけない人にあつた。それは詩織だった。さきに詩織が見つけたが、結婚を断ったことできまり悪かったので見ぬふりをしていて、滋のほうが見つけて、声をかけてきた。滋にとつて不愉快な別れ方をした彼女だったが、日本を離れることも手伝って急に懐かしさがこみあげてきた。

「遠山さん、お久しぶりです」

「あら、梶田さん、ご無沙汰しています。ご出張にお出かけですか」

「いや、役所を辞めました。一から出直そうとアメリカに行つて勉強し直そうと思つています。ニューヨーク便でアメリカに行きます」

「そうでしたか。私は上海にアクセサリーの店を出店する予定なので、準備のために上海に飛びます」

滋は退職に至るいきさつやアメリカにMBA取得のために行くことなどを手

短に話した。やがて、搭乗案内がアナウンスされ、ふたりはそれぞれ別々のゲートに消えていった。滋の前途には、どんな道が待ち受けているのか誰にも分からない。ただ、滋のいた役所のように、レールの上を走る人生ではないことだけは間違いない。